

学校名	熊本大学教育学部附属中学校	執筆者名	藤本幸弥
研究タイトル	社会の形成者を育成するために批判的思考を促す社会科授業開発 —歴史館との連携を中心核に—		

① 育てるべき資質や能力…自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。(1ページ程度)

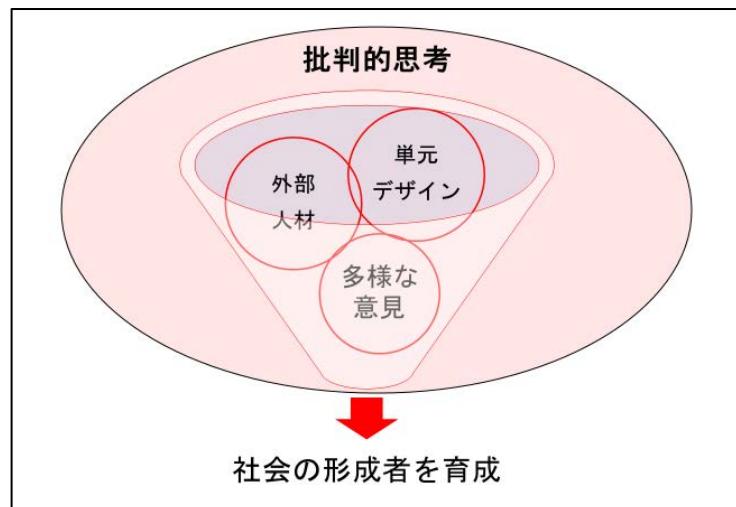
主に育成すべき資質/能力のキーワード	批判的思考 吟味
--------------------	----------

新学習指導要領が平成29年に告示されてから、およそ8年が経った。「予測が困難な時代」と言われるよう、過去に経験したことがないほど私たちを取り巻く社会情勢は急速に変化し、混こんを極めている。新型コロナウイルスによるパンデミック。ウクライナやイスラエルでの戦闘。日本においては、地震や火山の噴火、大雨といった度重なる自然災害。さらに地球規模の課題として、国連のグテレス事務総長の発言にみられるような「地球沸騰化」時代への突入。このような社会を生き抜く力を生徒に身につけさせることが教育に課された使命である。

これらの社会情勢、社会の要請を受け育むべき資質・能力の柱は何か。まずは、「資質・能力」をどのように捉えたか、確認しよう。奈須氏や溝上氏¹⁾の定義を基に、「資質・能力」は、学習指導要領に定義される「知識・技能」「思考力・判断力。表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という3つを柱とし、実社会において困難な場面にぶつかった際に、立ち向かうための汎用的な力であると捉えた。

では、中学校社会科において身につけさせるべき汎用的な力とは何か。それは批判的思考であると考える。溝上(2023)は批判的思考を「自身の情報処理プロセスの論理性・合理性を、省察的に熟慮する目的的・評価的思考である」²⁾と定義する。これをもとに本研究では、批判的思考を生徒が課題に対して見出した答えを吟味しよりよく磨いていく過程と捉える。批判的思考を育成すべき資質・能力の基盤と捉えた理由は以下の2つである。

1つ目は、学習指導要領や学校教育法に記されるように、社会科ひいては、教育全体の目標が社会・国家の形成者を育成することである。民主主義である日本においては、主権をもつ国民それぞれが、意見を述べながらより良い社会を築いてくことが求められている。だからこそ、社会科では生徒自身が持つ考えを大切にすることがより求められると考える。さらに、“より良い”社会の形成者になるために、多様なアプローチで意見を形成する必要がある。独りよがりの意見ではなく、自身の意見を何度も吟味するような単元デザインを行うことが求められる。その上で、教材開発はもちろんのこと、外部人材との連携、そして、他者と意見を共有し、取り入れたり修正したりしながら、より高度な意見を形成していくことが必要である。



研究の構想図

見ではなく、自身の意見を何度も吟味するような単元デザインを行うことが求められる。その上で、教材開発はもちろんのこと、外部人材との連携、そして、他者と意見を共有し、取り入れたり修正したりしながら、より高度な意見を形成していくことが必要である。

2つ目は、社会科授業においては、実社会においても課題解決が困難な課題を扱うことが多いからである。大人でも答えの出ない未知の課題に答えることは、先述した社会の形成者になるために欠かせないプロセスであると考える。しばしば、社会科は知識を蓄える教科、暗記する教科との声を聞く。社会の形成者となるためには、既習事項に基づき自身の意見を形成するための知識を蓄えることは必要である。しかしながら、社会科学においては、生徒が知識を網羅的に学ぶのではなく、課題に対して答えを導くために必要な知識を選択し吟味すること、すなわち批判的思考が重要である。

「予測困難な時代」を生き抜くために、自身の意見を何度も吟味することができるような批判的思考を基盤とし、より良い社会の形成者の育成を図っていく。

② 子どもたちの現状…・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握し、収集した確かな情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。（1～2ページ程度）

本年度より本校に赴任し、中学校2年生の授業を担当することになった。ここでは、2つに分けて現状を把握していく。1つは、「授業開き」とそこで得られた記述内容。もう1つは、昨年度、現2年生が1年生だった時に学校の社会科全体で実施されたアンケート結果。これらの2つの情報から、本校社会科学における在り方を述べよう。

1つ目は、「授業開き」とそこで得られた記述内容。授業開きでは簡単なクイズを行った。学校近くのコンビニエンスストアの看板を正確に描けるか、というものである。ねらいは、いつも見ている当たり前の世の中でも、正確に捉えようとすると難しいということを実感させるためである。生徒からは、「え？」「わからない」などの声が聞こえてきた。個人で描いた後、生徒同士で共有させるといったところから歓声が聞こえた。あえて教師からは答えを出さず、「なぜ、正確に描けなかったのか？」と、問うた。生徒の記述には、「注意深く見ていないから」「あたりまえと思って、気にかけないから」「普段は『見えている』だけで、意識して『見ている』わけではないから」といった回答がみられた。

このような学習活動を経て「なぜ、社会科を勉強するのか」と、問うた。本稿では、2年生4学級のうち1学級(39名在籍)を抽出し、生徒の解答をもとに作成した図1のワードクラウド³⁾から分析する。

出現頻度の高いものほど大きく表記されており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。

図1を参考にすると「学ぶ」「知る」という動詞を生徒が多く使っていることがわかる。また、社会科の学習であるため、「生活」「地理」「歴史」「過去」といった名詞が多く使われていることも特徴である。具体的な出現数は、図2・3の通りである。

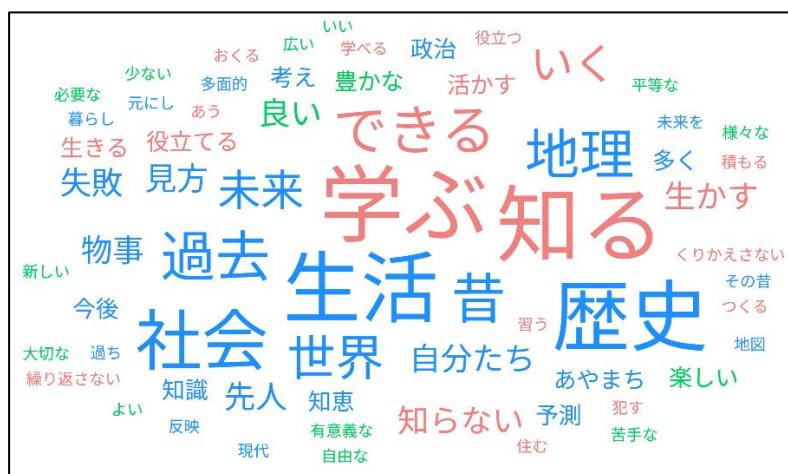


図1 生徒の記述を基に作成したワードクラウド

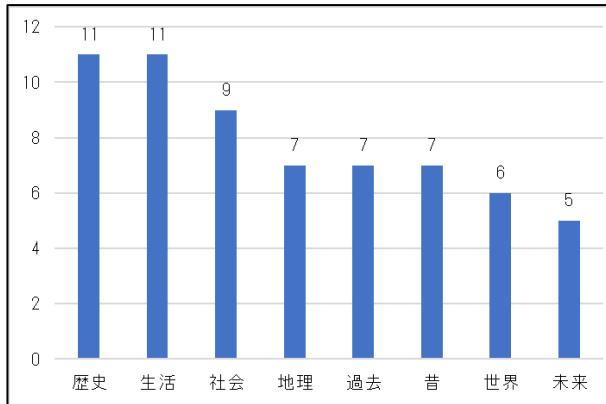


図2 名詞の出現回数

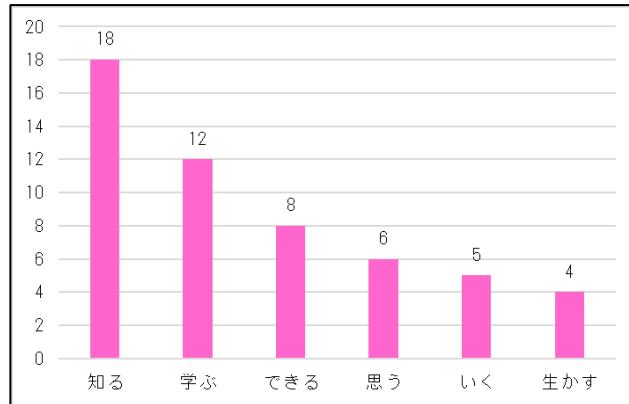


図3 動詞の出現回数

図2から、「歴史」「過去」「昔」といった名詞が多く挙がっており、中学生にとって社会科学習では、歴史的分野の学習に印象が強い、意義を持つ生徒が多いことがわかる。図3からは、「知る」という動詞が頻出している。これは、「①育てるべき資質や能力」でも言及したように、生徒が、社会科は知識を網羅的に学習する教科と捉えることを示す結果と言えるだろう。具体的に、「世界を知るために」「楽しいから(知らないことを知ることが)」「昔の事や世界について学ぶ事で今の時代になるまでにどんな事があったのかを知るため」といった回答が目立った。一方で、筆者が捉えるような、知識を基に自身の意見を吟味し、将来的には意見を表明することまで言及する生徒はいなかった。

社会科の学習と実社会の課題をつなぎ、意見を表明することを生徒がどのように捉えているか。2つ目の情報である前年度末のアンケート結果をもとに実態を分析していこう。

現2年生で「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と考える割合は、10.7%であった。昨年度末の3学年で比較すると、3年生の約20%に対して、1,2年生は半分ほどのペーセンテージとなっている。これは、3年生は公民的分野の学習で、実社会の課題を扱う場面が多いことが影響していると考えられる。

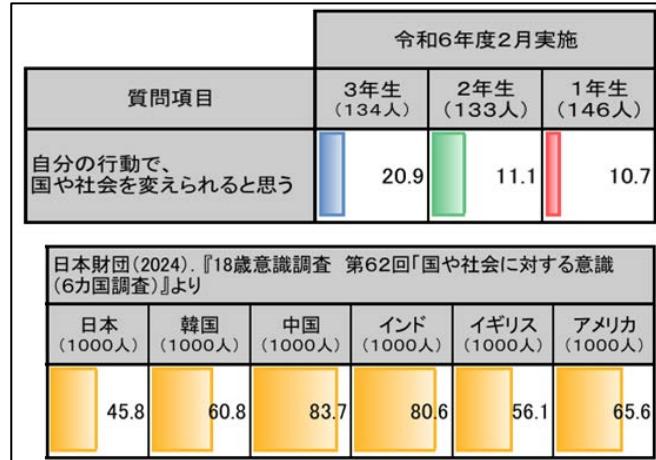


図4 前年度末のアンケート結果

また、18歳の意識調査であるため一概に比較はできないだろうが、他国に比べ日本では、「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と考える割合が低くなっている。この結果に対する社会科の果たすべき役割は非常に大きいと考える。

これらをまとめると、中学校社会科について歴史的分野の学習に意義を見出している生徒が多いこと。その一方で、自分の行動で国や社会を変えられると思う生徒の割合は10%程度と低いこと。以上の2点が要点であることがわかる。さらに2つの調査内容を関連付けて分析すると、社会科を学習する意義を「知る」ことに見出す回答が多い。教師が社会科学習で生徒を育成する際、岩田(2001)が述べる、「『知る』は社会事象の存在を認識すること」⁴⁾という定義に基づき、「知る」という言葉を認識する必要がある。なぜなら、生徒に「国や社会を変えられる」という実感を持たせるためには、この「知

る」という段階にとどまらず、その先にある物事を多面的・多角的に捉え、自身の考えを何度も吟味し、本質を掘ませる必要があるからだ。この段階に生徒を誘うためにも改めて、批判的思考を促す単元デザインが求められると考える。

以上のことから、2年生段階では、生徒が社会科の分野の中でも特に、強い印象を持っている歴史学習において自身の意見を表明し、学習の成果が実生活に繋がるような経験を踏むことが必要であると考えた。このような経験をすることで、社会科の学習にさらなる意義を見出すことができる。さらに自身の意見で社会に変化が起きるようなことがあれば、社会の形成者として必要な力を伸ばすことに繋がると考えた。

そこで、次節は中学校社会科歴史的分野における授業開発の在り方とその詳細な計画を述べる。

③ 教育支援の方針…子どもたちの現在の状況を踏まえ、過去の実践経験や知見（失敗）なども加えて、教育支援の方針を記述する。（2～3ページ程度）

1. 子どもたちの現状から

前節で述べた課題を踏まえ、よりよい社会の形成者を育成するために、外部人材との連携と多様な資料に触れるなどを支援の指針とする。

まず、外部人材に注目する理由は次の2つである。1つ目は、社会科学において絶対的な資料はないからである。社会科で学習する内容はあくまで一つの解釈にすぎない。授業では、教科書や資料集を使い、多面的・多角的に物事を捉えることをねらう。しかし、教室で終わる授業ではなく、実社会と結びつける必要があると考える。そのためには、専門的な知識を持つ外部人材と連携し、生徒それぞれが意見を形成できるようにすることが求められる。2つ目は、一つの文章を絶対的なものとして捉えるのではなく、批判的思考を働かせて物事を捉えるには、生徒が多様な資料に触れる必要があるからである。異なる切り口から同じ物事を見ることで異なった解釈と自身の解釈や考え方を比較し、吟味することに繋がる。

以上のようなことから、本研究では、実社会とリアルに繋がる課題とするため、外部人材との連携を図り、さらに批判的思考を働かせるため多様な資料に触れる場面を設けることを指針とする。

次節以降は、この2つに注目することによる効果を示す。

2. 学芸員の方や歴史館と連携することによる効果

本稿では、熊本県にある歴史館および学芸員の方と連携し、歴史的分野の授業を計画する。

なぜなら、歴史的分野の学習で教科書のみならず多様な資料や視点から自身の意見を形成し、歴史の専門家から学ぶことで、より精度の高い概念や理論を身に付けることができると考えたからである。

また、歴史館を活用することの意味は、学習指導要領にも見出すことができる。内容の取扱いには、「博物館、郷土資料館などの施設を見学・調査」することを取り扱い事項として記述されている。

さらに、これまで歴史館をはじめとする文化施設・資料館を学校教育に取り入れることの意義を見出す研究が行われてきた。笠原(1996)は、地理・歴史・公民、3分野の事例を挙げている。特に、歴史

的分野の学習では地域の歴史館を利用し、縄文・弥生時代の人々の学習を行っている。学芸員との協力のもと子どもが実際に見学・調査を行い、縄文・弥生時代の人々の暮らしをまとめ、発表する授業開発を行っている⁵⁾。このような実践から文化施設を活用する学習の意義を5つ見出しており、特に、学習の方法を身に付けさせること、社会の一員としての自覚を養うこと、学習に対する関心や意欲を喚起することを挙げている。また、國原(2024)は、教職課程の学生が実際に資料館見学を行い、中学校での授業を想定した学習指導案の作成、振り返りなどを手がかりに、中学校における資料館活用の可能性を明らかにしている。歴史館の資料などを通して、歴史的背景

を踏まえ、より正確に戦争史を把握させることに意義を見出している⁶⁾。

これらの先行研究から、資料館活用によって時代解釈や学習意欲の高まりがあることが明らかになっている。これは、図5に示す、Cに該当する研究であったと分析する。一方で、資料館の資料や学芸員の方と時代に没入し、学芸員の方と議論する。さらに導き出した概念から現代を考えさせるという、新たな可能性が残されている。つまり、図5に示す、Aに該当する研究に新たな提案性があると考える。前節までに述べたように本稿では、批判的思考に基づく学習と社会に変化を起こすことができるような授業開発を図っている。多様な情報や視点から情報を収集し、何度も歴史的事象を吟味し、歴史認識を深化させる。さらに、導き出した概念や理論から現代の在り方を検討すること段階を設定することで、歴史館の活用はさらに意義深いものになるであろう。その理由を、学校に設置される図書室での活用の実践を例に検討しよう。

3. 多様な資料を扱うことによる効果 一学校設置の図書室との連携からー

図書室と連携した授業を過去の実践に取り上げたのは、学校において膨大な情報が集まり多様な資料に触れることができる場であるからだ。このような環境は学校内で最も資料館の環境と近いと考える。

ここで実際に、図書室と連携した授業を挙げる。第3学年歴史的分野の学習の、全体のまとめとして行った、「平成の日本で重大な出来事は?」という単元である。歴史的分野の教科書に平成時代の歴史も記載はある。しかし、確たる歴史と明確に言い切ることのできない部分も残っている。そこで、歴史を多面的に捉え、多様な視点から切り込み、情報を吟味する力を最大限活用するため「平成の重大出来事は何か?」と問うた。ともに授業を行った司書補助はこの学習に対し、「準備された図書情報では足りないと感じた生徒が、昼休みに数名来館し、司書補へレファレンスを依頼してきた。自分で選択したテーマについて、情報が足りないからと諦めたり、ネットで検索して終わりにしたりせず、調べ上げようという姿勢が見られたことは、大きな成果であった」とその成果を分析している。

以上のような、先行研究や筆者の過去の実践を踏まえ、単元開発を行っていく。

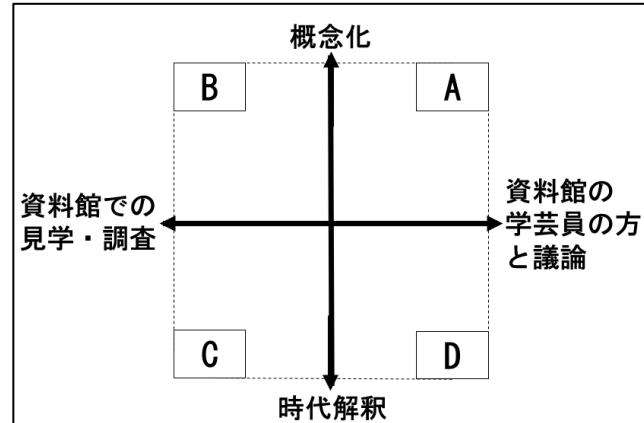


図5 先行研究の分析

④ 実行計画と準備状況…「③教育支援の方針」をもとに、自分が「いつ、何を、どのように行うのか」を具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。（3～4ページ程度）

具体的な工夫のキーワード	歴史館 学芸員 単元デザイン
--------------	----------------

1. 位置づけ

範囲：第2学年歴史的分野 江戸時代

教科書該当：「江戸時代の成立と対外政策」・「産業の発達と幕府政治の動き」

（矢ヶ崎典隆ほか『新しい社会 歴史』東京書籍、2021年、pp.114-137）

2. 教師の行動

(1)ねらい

江戸時代が260年に渡って繁栄した理由を検討する際、通史で語られる幕府の政策だけでは、260年もの間統治することはできなかったということに気づかせ、各藩の取組を吟味し、幕藩体制の特徴をつかみ、今後より良い政治の在り方を検討させる。

(2)教師のスケジュール

4月	学年配当と年間スケジュールの確認
5月	資料館を使った授業計画の立ち上げ、協力していただく機関について情報収集
6月	熊本県の歴史館の方に連絡
7月	歴史館へ赴き、担当の方と授業構想及び今後の日程について打ち合わせ
8月	歴史館の担当者の方と授業の詳細を確認
9月	授業実施日の確定など日程調整、授業内容の共有
10月	歴史館の方との連携した授業
11月	学習成果の検証、歴史館の担当者とも共有

3. 単元の詳細

(1)単元の目標

- ・武家諸法度や大名配置、鎖国政策など全国を支配するための江戸時代の仕組みを理解することができる。（知・技）
- ・支配体制が確立したことでの、産業が発展し、都市が発展したことを理解することできる。（知・技）
- ・幕府の財政が悪化し、徳川吉宗や田沼意次、松平定信などが改革に乗り出したことを理解することができる。（知・技）
- ・幕府と藩による支配体制ができたことで、国内での争いがなくなり、安土桃山時代までとは異なり、全国的に産業が発展した理由を考察し、表現することができる。（思・判・表）
- ・都市や産業が発展したものの幕府の財政は厳しくなり改革が進められた一方、藩の中には独自の政策を進め、人々を支配できた背景には、藩に与えられた権限が大きかったということを検討し、表現することができる。（思・判・表）

- ・江戸時代の日本で起きた事象について教科書や資料集をもとに検討し、時代の特徴を追求しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)
- ・歴史的事象を基に、より良い政治の在り方には何か、追求しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 単元の課題

江戸時代の政治にはどのような特徴があるか?

(3) 単元の課題に対して想定する答え

幕府と藩が人々を支配する幕藩体制である。幕府の政策により265年に及ぶ時代の基礎を築くことができた。江戸時代後半は、幕府の財政が悪化し、その影響力が弱まっていく反面、諸藩の改革が進められたことで、藩独自の支配を進めたという特徴がある。

(4) 追求課題

現代の日本では、中央集権と地方分権のどちらを目指していくと良いか?

(5) 各段階の課題と想定する答え

第1次	江戸時代の支配の仕組みを把握する	課題	265年も続いた江戸幕府の仕組みは、どのようなものか?
		答え	幕府は収益が大きく、外国とかかわる地域を直接的に支配し、それ以外の地域は藩に支配を任せる幕藩体制をとった。一方で、武家諸法度の制定や鎖国政策など幕府に抵抗できないようにする仕組みを作った。
第2次	幕藩体制が固まった結果、産業が発展していく過程を追求する	課題	幕藩体制による統治が固まった結果、国民の生活にどのような変化があったか?
		答え	新田開発の成果もあり、産業が発展した。交通路の整備なども進んだ。また、町人を担い手とする文化も生まれるなど生活が豊かになった。
第3次	幕府の力が弱まったことと各藩の改革を比較し、その違いを検討する	課題	産業が発展していったはずなのに、なぜ、幕府の力は弱っていくのか?
		答え	幕府の直轄地が少なく、金銀の算出が低下すると幕府の収入が大きく減っていったから。一方、各藩に与えられた裁量は大きく自由な政策をできたため、勢力を伸ばした藩が出てくるようになったから。
第4次	概念化を図る	単元の課題 「江戸時代の政治にはどのような特徴があるか?」を、再検討 追求課題 現代の日本では、中央集権と地方分権のどちらを目指していくと良いか?	

4. 展開の詳細

(1) 計画

次	段階	時間	教科書該当範囲	備考
1次	課題把握	第1時	1 江戸幕府の成立と支配の仕組み	第4章 2節
		第2時	2 さまざまな身分と暮らし	
		第3時	3 貿易の振興から鎖国へ	
		第4時	4 鎖国下の対外政策 5 琉球王国やアイヌ民族との関係	
2次	課題追求	第5時	1 農業や諸産業の発展 2 都市の繁栄と交通路の整備	第4章 3節
		第6時	3 幕府政治の安定と元禄文化	
3次	課題解決	第7時	4 享保の改革と社会の変化	第4章 3節
		第8時	5 田沼意次の政治と寛政の改革	
		第9時	特設 肥後藩の改革と諸藩の改革	特設
		第10時	6 新しい学問と化政文化 7 外国船の出現と天保の改革	第4章 3節
		第11時		
4次	まとめ	第12時	特設 学習課題「江戸時代の政治には、どのような特徴があるか」に対し、学級内での議論を通して概念獲得を図る。さらに、「現代の日本では、中央集権と地方分権のどちらを目指していくと良いか?」を検討する。	特設

(2) 計画に込めたねらい

①学芸員の方と連携した授業を2時間設定

学芸員の方と連携することで、教科書だけでは語られない情報を専門的に教授してもらうことができる。特に、第9時に当たる場面は学芸員の方の専門性が生きる。なぜなら、肥後藩の歴史は通史で語られる教科書でほとんど紙面が割かれないのである。学芸員の方や歴史館のアーカイブを参考にさせていただくことで、江戸時代における地方の実情に迫ることができる。

また、第12時のように教科書や資料集だけでは語りきることのできない課題を生徒が検討する場面で、専門家とも議論することで、より批判的思考を生かし、生徒それぞれの答えを導くことに繋がると考える。

②吟味する場面を設定

教科書の配列通りに学習を進めつつも、特設の授業を入れる。それだけでなく、各授業で答えが導かれそうになったところで、思考を揺さぶる資料を提示する。

例えば、第3時では、鎖国の学習をするが、薩摩藩(琉球王国との交流がある)や松前藩(アイヌ民族との交流がある)、対馬藩(朝鮮との交流がある)の様子を示すことで、「日本は完全に国を閉ざし

ていたのか？」という生徒の問い合わせが生まれることであろう。このような段階を踏み、批判的思考を促す学習活動を組織していく。

5. 授業実践の意義と課題の検証方法

本研究の意義と課題を明確にするために、アンケート調査と授業におけるワークシートを参考に検証を行う。

アンケート調査では、事前アンケートと事後アンケートを実施する。社会科は内容教科と言われる。そのため、事前アンケートでは「江戸時代の政治にはどのような特徴があるか？」に対する予想を解答させる。同じ項目を事後アンケートでも行い、学習内容にどのような変容がみられたのかを検証する。

また、ワークシートの記述を参考にすることで、質的な変容をさらに見取っていく。本研究では、批判的思考を重要視している。生徒が自身の考えをどのように変容させていったのか、質的变化を明らかにすることで、本研究の意義と課題がより明確になるであろう。

参考文献

- 1) 奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』、東洋館出版社(2017)、pp. 36-49 や溝上慎一『学びと成長の講話シリーズ4 インサイドアウト思考—創造的思考から個性的な学習・ライフの構築へ』、東信堂(2023)、pp. 42-45 を参考にした。
- 2) 溝上慎一『学びと成長の講話シリーズ4 インサイドアウト思考—創造的思考から個性的な学習・ライフの構築へ』、東信堂(2023)、p. 42
- 3) 株式会社ユーザーローカルが提供する「A I テキストマイニング」を使用した
- 4) 岩田一彦『社会科固有の授業理論 30 の提言：総合的学習との関係を明確にする視点（社会科教育全書 42）』、明治図書出版（2001）
- 5) 笠原吉廣「文化施設や文化財等の文化遺産を活用した学習—中学校社会科の学習を通して」東京都立教育研究所『教育じほう』、東京都新教育研究会(1996)、pp. 42-45
- 6) 國原幸一朗「資料館の資料を活用した授業づくりと学習指導上の課題 ——中学校社会科歴史的分野の「戦時下の人々の生活」を事例として—— ——中学校社会科歴史的分野の「戦時下の人々の生活」を事例として——」『名古屋学院大学 教職センターワーク』(2025)、pp. 29-45
- 7) 熊本市立東野中学校 職員一同「調べる学習を通して情報社会で生き抜く力を育成する」、第28回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習指導・支援部門 提出物(2024)